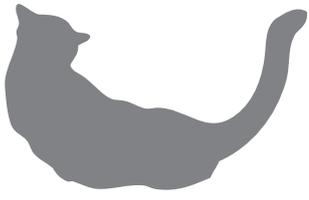


〈中学生の部〉

・最優秀賞	18
・朝日新聞社賞	19
・紀伊國屋書店賞	21
・新潮社賞	22
・東京理科大学賞	24
・二松学舎大学賞	25
・くまもと賞	27
・佳作	28

〈高校生の部〉

・最優秀賞	42
・朝日新聞社賞	43
・紀伊國屋書店賞	45
・新潮社賞	46
・東京理科大学賞	48
・二松学舎大学賞	49
・くまもと賞	51
・佳作	52



最優秀賞

坊っちゃんの江戸っ子口調と

文芸の伝統による裏打ち

筑波大学附属中学校

1年

河面こうも玲れい

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行

ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫つかぶりの、
香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬
も同然なやつとでも言うがいい

『坊っちゃん』は、全ての場面が面白い。まず冒頭に、あ
とさき考えない坊っちゃんのいたずらの事例が示され、彼の
性格が手に取るようにわかる。そして漱石の名文で、つい笑っ
てしまう箇所がいくつもある。

そんな『坊っちゃん』の中でも一番気に入ったのは次の一
行だ。

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫つかぶ

りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴け
ば犬も同然なやつとでも言うがいい」

これはうらなり君の送別会で坊っちゃんと山嵐が赤シャツ
の悪口を言っている場面だ。悪口といっても罵倒というより
どこかユーモラスであるところがまたよい。

読んだ瞬間目が引かれ、つい読み返してしまった。文学作
品で悪口を並べたてるものは読んだことがなかったから。そ
して頭の中で声に出して読んでみると実に響きがいい。さら
にリズムも完璧だ。また、自分の演説はあまりよろしくない
と言う坊っちゃんの口からこんな言葉がスラスラと出てくる
ことも、深く印象に残った。早口でまくし立てることができ
る坊っちゃんなら、演説も得意のはずだと思っただけけれど。

『坊っちゃん』は一九〇六年に書かれ『ホトトギス』に掲
載された。当時の江戸言葉は、今耳にする「標準語」よりもつ
と「江戸弁」に近かったのかもしれない。江戸言葉は、言葉
をリズムよく並べて、たたみかけるようにしゃべるのが一つ
の特徴だ。

ただ、この手法は江戸言葉だけでなく、古くから日本の文
芸で使われ、磨かれてきたものだ。落語の寿限無、歌舞伎の
外郎売や弁天小僧菊之助の口上などは、そのほんの一例であ
る。時代はまだまださかのぼれる。阿刀田高は『ことば遊び
の楽しみ』の中で、万葉集にある豊文の例として天武天皇の

歌を紹介している。「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見」。そして文芸の世界だけでなく、私たちの日常にも言葉をユーモアとともにリズムに乗せて並べる手法は根付いている。「けっこう毛だらけ猫灰だらけ」などの地口もその一つだ。あるいは映画フーテンの寅さんがやるテキヤの口上も代表例の一つだ。畳みかける口ぶりが心地よい。さらに日本最古の書、古事記にも言葉あそびが使われているというネット上の記事まで見つけたが、具体例が見当たらないので今後の調査課題としたい。

こうして見ると、私の目をひいた一文は、ただ赤シャツを罵る言葉ではなく、また単なる威勢のいい江戸言葉でもなく、日本の文芸や長い伝統の中で培われ、さらには日常にまで浸透してきた技法による言葉であることがわかった。

なぜ私の目がこれほど釘付けにされたのか、知れば知るほど興味深くなっていく。言葉の歴史というものを、私はこれからもつと知っていききたい。

審査講評

『坊っちゃん』の江戸っ子口調に注目し、落語、歌舞伎、さらには万葉集の時代にまで遡って考察している。一行から連想を広げていく自由な発想が素晴らしい。

朝日新聞社賞

漱石の冒頭文と創造力

大妻中学校 2年

新井 芹佳

作品名『それから』
選んだ一行

誰か慌ただしく門前を馳^かけていく足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄^{まいた}が空から、ぶら下っていた。

「誰か慌ただしく門前を馳^かけていく足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄^{まいた}が空から、ぶら下っていた。」

これは主人公の代助が目覚める時の一文であり、この小説の冒頭文だ。私は漱石の作品は冒頭文が印象に残りやすいイメージだが「それから」の冒頭文は普通だと思っていた。しかし、読み終えた後、私はこの一文に代助と彼を取り巻く人々との二つの物語の発端と行く末が表されていると気づいた。どこが二つの物語の発端と行く末を表しているのか。

まず足音を聞き、目覚めた代助はその足音が誰のものかわかっている。なぜなら第一章の最後で書生の門野に郵便が届

いていなかったかと尋ねていたからだ。おそらく代助は足音が郵便配達人のものだとして知っていたのだろう。そして代助のもとにははがきと郵便が届いていた。はがきは親友の平岡常次郎からで、郵便は父親である長井得からのものだった。これが二つの物語の発端だと思う。一つは代助と平岡の妻であり、代助がかつて想いを寄せていた三千代との物語、もう一つは代助と実家との物語だ。では二つの物語はどうなっていくのだろうか。

はじめにこの小説の結末は代助と三千代が再会したことでお互いに惹かれあってしまったことを平岡に伝える。そして平岡は三千代をゆずる代わりに代助と絶交してしまう。さらに名家の娘の縁談を断り、人妻と関係を持ったことから実家に勘当されてしまう。

私は二つの物語の行く末が冒頭文の代助の睡眠に表されていると思う。小説の冒頭で代助は近來の癖で心臓の鼓動を気にするようになっていた。これは代助が気づかないうちに三千代の病んだ心臓を気にしているということだ。また代助は空からぶら下がっていた組下駄が次第に遠ざかり、消えてしまったところで目が覚める。これは男性用の下駄である組下駄が遠ざかり、消えてしまう、つまり平岡常次郎や長井得などの男性が代助のもとから離れてしまうことを表しているのではないだろうか。

最後にこの小説は偶数の章では代助と三千代との物語が書かれ、奇数の章では代助と実家との物語が書かれ、クライマックスでは二つの物語が合わさっている。このことから私は小説は複数の物語が合わさってできていると思う。そして漱石は複数の物語を織りなし、冒頭文から表現できる鬼才なのだ。

審査講評

『それから』の有名な書き出しについて、「代助と彼を取り巻く人々との二つの物語の発端と行く末が表される」と気付くまでの考察が深い。若々しい感性がほとばしる感想文。

私と漱石と万年筆

成城中学校 2年

江口 寛冬

作品名 『余と万年筆』
選んだ一行

尤も十二年前に洋行するとき親戚のものが餞別として一本呉れたが、夫はまだ使わないうちに船のなかで器械体操の真似をしてすぐ壊して仕舞った。

「なあんだ。漱石くんって、実は僕らと同じ感覚の持ち主じゃないか。」

もし同じクラスに夏目漱石がいたら、思わず肩を組んでしまっただろう。

小学校では鉛筆以外の筆記具は禁止で、鉛筆を卒業した従兄が使っている筆記用具は私の憧れだった。中学入学祝いに名前が刻印されているPARKERをもらった時は、踊りだしそうなくらい嬉しくて、何度も何度も手触りを確かめていた。でも不用意にペン回しをして落としてしまい、ペン軸を

曲げてしまった。これは「尤も十二年前に洋行するとき親戚のものが餞別として一本呉れたが、夫はまだ使わないうちに船のなかで器械体操の真似をしてすぐ壊して仕舞った」彼と全く一緒なのだ。この文で、彼を急に身近に感じてしまった。

漱石がこの万年筆を失くした後、ペリカンを携えて創作活動を進めていくその様子は滑稽だった。自分でぞんざいに扱っているくせに、やれインクがぼとぼと垂れるだの、やれインクの出が悪いだのいって、最終的には使うのをやめてしまうほど文句満載である。しかし、その文面からは、不思議と万年筆への愛情を感じた。本当は大事にしたかったのだよとペリカンに謝りたいのに、煙管や盃、瓢箪などの蒐集狂と並列に扱われてしまうプライドが許せないのか、素直になれない意地っ張り感が見え隠れする。蒐集狂と同等にされるのが嫌だというのは理解できるけど、私みたいに素直にペンと向き合えばいいのに。

私は壊してしまったPARKERを速攻修理に出して、美しい状態になって戻ってきてもらった。現在は数本所有しているけれど、決して「財力ある貴公子や道楽息子」ではない。所有者不明で廃棄寸前になっているものや壊れてしまったものを譲り受け、装填するインクの色味や濃さ、硬さ、ノートとの相性を吟味してカスタマイズしている。皆は入手方法がセコいというけれど、文房具は使うためにあるのだから、しっ

かりと使ってやらねば可哀そうだ。この点について、なかなか共感が得られず、なんとも悲しいことか。

また、漱石は「酒呑が酒を解する如く、筆を執る人が万年筆を解しなければ済まない」と述べているが、この随筆を書いた時代とは異なり、今は筆を執る人（作家）ですら筆を執らず、多くの人は直筆で文字を書く機会が減っている。ひよいと両親の手を見たら、一人ともペンだけが無くなっていた。私も作文はパソコンで書いている。もう「書く」という言葉の意味は「入力する」、あるいは「指先でなぞる」と同義語になりつつあると思う。

もう少ししたら、私は受験勉強のために机に向かい、がりがりと書かねばならないが、学生時代の今を過ぎたら、この所作はもっと失っていくだろう。純粹にペンを愛でて直筆で書く行為は期間限定の学生特典なのかもしれないと思わされた。

審査講評

著者自身の万年筆への愛がよくわかり、好感が持てる。「書く」という行為が「入力する」と同義になってしまった現代の状況を、まとめている。

新潮社賞

阿蘇に登って考えたこと

暁星中学校 3年

澤田 憲

作品名 『二百十日』

選んだ一行

「田舎者の精神に、文明の教育を施すと、立派な人物が出来るんだがな、惜しい事だ」

山路を登りながら、こう考えた。

八百万年続く火山活動が、九州を北と南に引き裂こうとしている。その裂け目のあちこちで噴煙が立ち、大地が褶曲し、浸蝕が進む。住みにくい人の世は所詮それらの上にある。

諫早から島原へ抜ける峠で、僕は千々石断層を眺めた。切立った崖は裂け目の始まりだ。そこから雲仙を越え、有明海を渡り、小天温泉に泊まり、阿蘇の外輪山を尾根伝いに進む。そしてついに大観峰に立った時、漱石の『二百十日』の舞台が視界いっぱい広がった。

正面に「烟り」を吐く中岳。左手に圭さんが落ちた「火熔

石の流れたあと。「右手前には「あの下女」が働く内牧の旅館が見える。熊本地震で源泉が涸れ、コロナ禍で廃業した。もはや「恵比寿」はないが「よな」はある。赤い灰は降り続け、九州の裂け目を埋め戻す。だが間に合わない。百万年後、ここは海峡になると言う。偶然か、海に向こうは松山だ。

それにしても、作中で圭さんが「単純でいい女だ」と言った下女はどんな人だろう。碌さんが「剛健な趣味」だと言うと、すかさず圭さんが「田舎者の精神に、文明の教育を施すと、立派な人物が出来るんだがな。惜しい事だ」と言う。この一言が妙にひっかかる。

こうして九州を旅し、気づいた事がある。困った時、ふと優しく声を掛け助けてくれる人が多い。車でも煽り運転は皆無で、停車して道を譲ってくれる。東京では余り見かけない光景だ。「田舎者の精神」には、この人情味が含まれているように思う。大自然に囲まれ、それを畏怖し助け合う環境が背景にあるのだろうか。いや、東京にも人情厚い江戸っ子がいたはず。でもいつの間にか世知辛い都会になった。山村留学や離島留学が流行る今、田舎へ引越すのも悪くないかも知れない。

他方、「文明の教育」とは何だろう。下女は身なりに無頓着で、ビールも半熟卵も知らない。まさか接客の訓練ではあるまい。日清、日露の連勝で軍国主義が台頭し、教育が目指

す「文明」も個人主義から良妻賢母へ転換した。思えば漱石は、時代に翻弄される女性を描いている。例えば、『虞美人草』の藤尾や『三四郎』の美禰子は家制度に抗うが挫折する。『それから』の三千代や『門』の御米は子供を亡くし居場所を失う。『道草』の御住や『明暗』のお延は拠り所を実家に求める。いずれも自我を持った都会の女達の悲劇か。

『二百十日』の下女は正反対だ。名前さえない。男達は「東京へ連れて行って、仕込んでみる」と物扱いする。「女でも登ります」と言われ意地を張る。だが二百十日の嵐で迷子に。まるで天罰。「無暗に人を圧逼する」のは「華族や金持ち」とは限らない。これは男達の悲劇。いや、それと気づかぬ喜劇だ。

眼下では「阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空に吹き出している。」四十六億年の地球史に照らせば百年では大して変わらない。人の世も同じかも知れない。でも変わって欲しくない事と変わるべき事があると気づく。

審査講評

『草枕』風の冒頭から、ダイナミックな地球生成の描写、そこで営まれる人間のちっぽけな生活へ。感想文と
いうより『二百十日』をネタにした良質なエッセイだ。

東京理科大学賞

エゴイズム

白百合学園中学校 3年

杉田 すぎた 明日香 あすか

作品名『ころ』

選んだ一行

平生はみんな善人なんです。少なくともみんなふつうの人間なんです。それが、いざというまぎわに、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。

先生は、人間らしい人間です。彼は親友であるKを裏切り、Kを死に追いやりました。Kの気持ちを知りながらお嬢さんとの縁談の話を進めた先生は、大変なエゴイストのように思われます。しかしその根幹には、先生がお嬢さんをいわば信仰にも近い形で愛していたという悪意とは程遠い感情がありました。それがいつしか嫉妬や焦りを生み出し、Kを裏切る結果となったのです。先生は、人を悪人に変えてしまうのは金だと言いました。これは、金のために先生を裏切った叔父のことを言っているのでしょうか。けれども、先生が知っている

る人間の中に、悪人はもう一人いると思います。それは先生自身ではないでしょうか。先生は自分を裏切った叔父を軽蔑しながら、自分自身も人の信頼を裏切るようなことをしてしまいました。先生と叔父との違いは、金のために人を裏切ったか、恋のために裏切ったかというところでは、これら二つは一見全く相容れないように思われますが、実のところ自らの欲望のためであるという点では、両方ともエゴイズムという言葉に集約されるのではないのでしょうか。

エゴイズムと聞くと、全くの悪のように感じます。しかしエゴイズムという言葉が意味する、自分の利益を重視することと自体はそこまで悪いものではなく、むしろ人間誰しもが持つ本能の一つだと思います。エゴイズムの本当の問題は、自分の利益を追求することが、ほとんどの場合他人に悪影響を及ぼすというところにあると思います。先生は決してKを苦しめようとして縁談の話を進めた訳ではありません。ただお嬢さんへのどうしようもない恋慕の情からとった行動だったのです。

特に悪意のない人間が、自分自身のために行動したとき、他人を傷つける結果を生んでしまう。それが悪人になるということであり、それは人間が存在する以上起こり続けることだから、先生は「恐ろしい」「油断ができない」と言ったのだと思います。

先生の人間らしさはKが死んだあと、罪の意識に苛まれ続けるところにもあると思います。先生はKを自殺に追い込んでしまった罪悪感からどんなに幸せな瞬間でも、それが不幸の兆しではないかと思ひ、Kの死後はKの死に取り憑かれたような日々を送りました。先生は乃木大将の死を受けて、「生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へつきたてた一刹那が苦しいか」と書き残しました。乃木大将にとっての三十五年は先生にとってのKの死後の期間だったのだと思います。そして先生は、その期間の方が自殺の瞬間よりも苦しいと判断して死を選んだのではないでしょうか。そうだとすれば、先生の自殺はKへの罪滅ぼしにはなりません。では、先生はなぜ死を選んだのでしょうか。私は、結局は自分のためではないかと思ひます。

「審査講評」

中学生の多感な視点で、現代人のだれもが持っている「エゴイズム」について、自分自身の生き方を踏まえながら、しっかりと自己分析を行っている。

二松学舎大学賞

Kのこころ

浦安市立高洲中学校 1年

鈴木^{すずき} 悠佳^{ゆうか}

作品名『こころ』
選んだ一行

私はしまいにKが私のようにたった一人で寂しくなってきたがなくなつた結果、急に処決したのではなからうかと疑いできました。

「こころ」という作品において、Kは失恋によって自殺したという風に描かれている。Kの思ひを寄せる女性が先生と結ばれたすぐ後にKが命を絶つたので、読者の誰もが、そして先生もそう考へていただろうところに、降つてきたのが私の選んだこの一文だ。

Kがお嬢さんへの失恋によつて死んだとすると、何か違和感がある。そう思ひながら読んでいた私は、この一文を読んだ時、そのKの真意と描かれ方の間にあつた違和感が消えた気がした。

私には、Kがお嬢さんに抱いている感情は、一種の戸惑いのように思われる。初めて美しい物に触れた幼子が、すっかり熱に浮かされてしまつて、この感情をどうしたら良いか分からなくなつて彷徨つている感じがする。死まで至るほどの激情が感じられないのだ。

対して、Kが先生に対して抱いている感情は、もつとしっかりしたものであると思う。Kは、先生を暗い過去から自分を立ち上げさせるための支えとしていたと思う。私は、友情と恋情の差はあれど、先生とお嬢さん、どちらに対してしっかりとした感情を持つていたかと問われれば、Kは先生を選ぶ気がしてならないのだ。

そして、その持論をもつてして、一人きりで寂しくなつて、ということについて考えてみると、Kの死の理由に対する私の結論が導き出された。

Kは恋が断ち切られたから死んだのではなく、友愛が断ち切られたから死んだのではないかという事だ。

元から、Kはお嬢さんへの恋心を告げてから親友である先生の様子がおかしい事に気づいていたのではないだろうか。そして、その恋心を親友のために断ち切る覚悟を決めるために先生に自分を叱責するように頼んだ。そうして、先生も自分に恋心を打ち明けてくれた時点で身を引くつもりだった、というKの本心が、この先生の語りの裏にあるのではないだ

ろうか。

しかし実際、先生はKに抜け駆けするような卑怯な手を使つてお嬢さんと結ばれる。Kにとっては、それが何より悲しかったのでは、と感じる。

心の支えとしていた親友が、自分を裏切つたことで、自分は孤独になつたと錯覚した彼は、寂しくて仕方がなくなつて自決した。それがKの死の理由だと、私は考えた。

先生が独占欲に駆られ、結論を急がなければ。もつとKと腹を割つて話していたら。Kは生きていたのかもしれないと思ふ。先生が、もつと、自分はKの支えである、という自覚を持つていたならば……。

二人の友情は同じ女性に恋した時点で引き裂かれているように見えて、いくらでも救いの結論のである、たればの中で最悪の結末を選んでしまつただけなのだ、私は思えてならない。

審査講評

Kの自決がお嬢さんへの失恋ではなく、先生との友情が裏切られたことによるものと読み取っているのがとてもよい。

くまもと賞

理想の信頼関係とは

大妻中学校 2年

北山 きたやま
桜弓 さゆみ

作品名『ころ』

選んだ一行

私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っっている。あなたはその一人になれますか。なっってくださいか。

「なれますか。なっってくださいか」この台詞の言い回しに、先生が日頃感じている恐怖の片鱗を垣間見た気がした。先生は過去に信用していた叔父に騙され、自身も親友を裏切った。故に「私」からの信頼を嬉しく思うと共に、また騙されるのではないか、裏切ってしまうのでは、と怖かったのではないだろうか。

しかし、先生と「私」の間には確かな信頼関係があった。「私」は先生の自殺を知った時、実の父親の死に際であるにも関わらず、少しもためらうことなく先生の家へ向うほど先生の事

を尊敬し、本気で、真面目に、先生を理解しようとした。また先生は、何千万という日本人のうちで、「私」だけに自身の過去を伝えて、「私」のこれからの人生の「生きた教訓」にしようとした。それなのに、先生は自殺をしようとした。

先生の自殺の原因は、親友のKが自殺したことに対する罪悪感、自分が最も信愛している妻にすら自分の本質を理解してもらえない孤独感に加えて、自分を尊敬してくれている「私」を疑ってしまうかもしれないという恐怖もあったのではないか。先生は「私」を信じていたから。疑いたくなかったから。疑ってしまう前に自らを殺してしまったのではないか。

結果的に、先生は自ら命を絶ってしまったのだが、私は先生がただ不幸なだけの人ではなかったと思う。また、先生自身もそう考えて生きていたと思う。たとえ、その人生にいくつもの苦悩や恐怖、孤独感や罪悪感があり、最終的に自分までも殺してしまったのだとしても。

なぜなら先生は、死ぬ直前に他を信用することができた。「私」に自身の過去や秘密、過ちを伝えられた。先生は決して不幸な人間ではなかった。

私も、先生と「私」のような信頼関係を誰かと築きたい。自分のことを本気で理解しようとしてくれる人と、自分の過去や秘密、過ちまで全て伝えることができるような信頼関係

を。

私は今すでに、家族や友達とある程度の信頼関係は築けていると思っている。しかし、それが私の求めている信頼関係なのかどうか、断言することはできない。なぜなら、私はまだほんの十数年しか生きていないから。若くて未熟で、まだ大した人生経験も積めていない子どもだから。だからこそ。私も、生きていくうちにたった一人でもいいから、人を信用して、人に信用されてから死にたい。家族でも友達でも誰でもいい、自分以外の誰かと、確実に強固な信頼関係を築いてから死ぬことができれば。

審査講評

物語に入り込み、「人間の生きざまと信頼関係」について考えて、筆者自身の信頼関係の在り方まで洞察している。

佳作

迷える男女

大妻中学校 2年

徳永 美南
とくなが みなみ

作品名 『三四郎』

選んだ一行

「迷える子（ストレイ・シープ）」と美禰子が口の内です。三四郎はその呼吸（いき）を感じることができた。

美禰子が三四郎に放った言葉、「迷える子」には、彼女のどんな思いが込められていたのか。これは読み手によって大きく解釈が分かれるであろう。私はこの言葉を、自分や三四郎の心が色々な出来事により揺れ動いているということを感じたい、美禰子なりの三四郎へのアピールだと解釈している。

こんなシーンがある。美禰子に誘われた三四郎が、広田先生、野々宮先生、よし子と共に菊人形を見に出かけた際、美禰子が体調を崩し会場を出てしまう。彼女の後を追った三四郎は、静かな場所へ彼女を誘導し、休息を取らせる、という所だ。ここで美禰子が三四郎に「迷える子」と言うのだが、

この時はまだ三四郎はこの言葉の真意を理解できていないと読み取れる。

まず、なぜ美禰子の心が揺れ動いているのか。それは、自分のなりたいたい理想像と現実の違いに悩んでいるからだと思う。彼女は周囲の人からはイブセンの女ようだと言われている。イブセンとは、自我に忠実な新時代の女である。しかし、現実はどうもいかず、最終的には兄の友人の縁談を受け、ごく一般的な結婚に至る。従って、彼女は自我に忠実に生きようとするも、時代の風潮により思うように生きられない葛藤を抱えていると言える。また、三四郎の心が揺れ動いているのには、上京して初めて経験することが多い事が深く関連していると思う。例えば学問であったり友好関係が出来上がっていったりなど、熊本に居た時とはまた別の世界が三四郎の中で出来上がっているのだと思う。なにより、三四郎は美禰子に恋心を抱いている。慣れない環境で慣れない感情に振り回されるのでは、心が揺れ動くのも頷ける。

私が注目したのは、美禰子が三四郎に迷子の英訳「ストレイ・シープ」を伝えた後、三四郎の反応を見て、

「私そんなに生意気に見えますか」

と問うシーンだ。なぜ彼女はこんな質問を三四郎に投げかけたのだろうか。私は、これも彼女が体裁を気にし、自分の理想の女性になれていないことの表れではないかと思う。三四郎

も美禰子も、お互い色々なことで悩み、葛藤し、日々を送っている。そのような点で、私もあなたも、「迷える子」なのよ、といったことを彼女は伝えたかったのではないか、という考えに至った。お互い色々悩むところがあるのねというストレートな表現ではなく、英訳を上手く使った表現で美禰子の気持ちを間接的に書く所に、漱石の魅力を感じた。

この作品の魅力は、多様な表現技法だけでなく、テーマそのものだと思う。上京し初めてのことだらけで戸惑う様子や、理想と現実のギャップで苦しむ様子、体裁を気にするところなども、現代社会に通ずる所があると思う。時代を越えても共感できる所や現代と似ている所などがあり、様々な視点で楽しめる所がやはり最大の魅力なのではないかと思う。

佳作

影と光

大妻中学校 2年

茂呂^{もろ} 美羽^{みう}

作品名『ころ』

選んだ一行

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。

人は誰でもころに「影」を抱えている。では、その影に負けるときの心情や状況はどのようなものだろうか。なぜ先生は影に負けてしまったのか。この本を読みながら、私は影という言葉の意味の複雑さに振り回された。そのきっかけとなったのが、「私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。」という一文であった。

先生は終始孤独だったと思う。叔父に裏切られたり、親友を自殺に追いやりたりなどの苦しい過去がある先生。そんな中、一番愛していた妻、また信頼すべき妻に対しても、自分が親友を自殺に追いやったのだと真実を告げることができずにいる。この状況に限界がきたのだろうか、酒浸りになり、

書物の中に身を投じようと試みた。でもわざとこんな真似をしたという意識がどこかにあり、己を偽る愚物としか考えられず、つねに不愉快な己から逃れることができないという結末。彼は誰にも自分のころを打ち明けることができず卑しい己とずっと向き合い続けているのだ。誰にも話せない孤独が彼にとつての「影」なのではないかと考えた。

物語の中では上記の一文のあとに、こう続く。「初めはそれが偶然外から襲って来るのです。しばらくしているうちに、私の心がその物凄く閃きに応ずるようになりました。しまいは外から来ないでも、自分の胸の底に生れたときから潜んでいるものごとくに思われ出して来たのです。」先生は、時々襲われていた影にどんどん支配されていくようになる。深く果てしない孤独という影にのみこまれてしまったのだ。

人間はころの中に、「影」と「光」の二面性を持っている。先生は、自らの考え方で影の部分をどんどん大きくしていった。これは、先生だけでなく誰でも陥ってしまう人間の持つ危うい部分なのではないのだろうか。たとえ、心に傷を抱えていたとしても、それを誰かに話したり、思いを共有することで影は次第に小さくなってゆく。先生のように、孤独の沼に陥ってしまうと、支配されるだけだ。もし遺書ではなく、生きている間に主人公に告白していたらどうなっていたのだろうか。主人公は何らかの形で先生の自殺を止めることが

できたのかもしれない。

悲しいことに日本では十代の死因の一位は自殺となつてい
る。「なぜ自殺をしたのか」という問いに対する明確な答え
を出すのは難しいが、自殺を選んでしまう根底には、孤独が
あるように感じた。孤独の影は、先生の時のように突然ここ
ろに忍びこんでくる。その影とどう戦つていくか、光でここ
ろを満していくのが人生の中でもっとも大切なことだと強
く思った。

佳作

無とは

暁星中学校 3年

杉浦 すぎうら
快 かい

作品名 『夢十夜』

選んだ一行

「と云つて無はちつとも現前しない。」

「と云つて無はちつとも現前しない。」これは夢十夜、第
二夜にて侍が無を悟ろうとしている時の一文である。この一
文はいくら悟ろうとも実際に見ることは出来ない無を簡潔に
表していると思う。

まず、侍は和尚との禅問答にて無とは何かを問われる。し
かし、一向に悟ることが出来ない。さらに和尚から悟れぬな
ら侍ではないとも言われてしまう。そこで、少々気が立った
侍は置時計が次の刻を打つまでに悟れなければ自刃しようと
心に決める。

そもそも仏教における無とは「有無、是非、善悪といった
一切の相対的な思慮分別を超越しきつた心の状態」だそうだ。

仏教においても飽くまで心がどうあるかの一辺に無はあるのだ。当然、現前するようなものではない。それを悟ろうというのであるから一筋縄ではないのだ。侍は無を意識する。心の中で強く念じる。だが、やはり現実の何かに意識が移ってしまう。そうしているうちに侍は頭が変になってしまう。そして、こんな事を言い始める。「行灯も蕪村の画も、暈も、違棚も有って無いような、無くって有るように見えた。」私は読んでいて、やっと無を悟ったかと思った。しかし、そうではなかったようで、この文の後に私の選んだ一文「と云って無はちつとも現前しない。」が来るのだ。これは、侍が有って無いように感じていたのは行灯や蕪村の画。つまりは、現実の物体に過ぎなかったのである。和尚に問われた、こころの状態にあたる無とは別の感覚だったのだ。ただ、私が思うに侍が一切無の領域に達していなかったかと言えはそうではないと思われる。結局、時計が鳴る刻に悟るには間に合わず、侍は脇に置いておいた短刀にすぐ手をかけた。悟れなければ死ぬと自刃すると決めていたから当然であるが、迷いなく短刀に手をかけるといふ行動にはある種の普通ではない心の状態が必要ではないかと私は考えている。よく侍は死を恐れないうという。この、禅問答をしていた侍もまたその例外ではなかったのだろう。死に対し迷いのない彼らの心には多少、無に近い感覚が備わっていたのではないか。和尚の言う悟

れぬなら侍ではないというのもこのような所を指すのではないかと思う。そうであるならば、この侍は初めから無の状態にある意味で足を踏み入れていたのである。だが、それを感ずることが出来なかったのだ。侍は無を現前させようと意識し続けた。しかし、無は彼の心の内にしかいられないわけである。無とは案外にも我々の心にあるが、我々には見ることは叶わない。故に気付けず悟れない。この事が「と云って無はちつとも現前しない。」という一文には込められているのだと私は思う。

佳作

正義と不条理

白百合学園中学校 2年

川本^{かわもと} 理咲子^{りさこ}

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。

「親ゆずりのむてつぼうで、子どもるときから、そんなばかりしている」。

これは『坊っちゃん』の有名な書き出しだ。ありきたりな選択のように思われるかもしれないが、現代にも通じる世の中の不条理を一言で表わしており、私の心に深く刻まれた一文である。

『坊っちゃん』は、正義感の強い主人公の「坊っちゃん」が、悪賢い「赤シャツ」や「野だいこ」を相手に痛快な活躍をする話である。私は過去に四回読んでいたが、はらはらしながら思わず物語の中に引き込まれていき、読む度に新しい

発見がある。

ただ面白いだけではない。この作品には、世の中や人生について考えさせられるものがある。主人公は最後、数学教師の「山嵐」と共に教頭である「赤シャツ」や美術教師「野だいこ」に卵をぶつけ、殴りつけ、読者のかっさいをあびるが、結局は教師をやめざるをえなくなってしまう。世の中では必ずしも正義が勝つとは限らない。いくら真つすぐ生きていても、最後は「赤シャツ」のような狡猾な権力者にはかなわないのだ。大きな目で見れば、「坊っちゃん」のような人物は、社会に生きていくのが難しい人である。この小説はそれを教えてくれる。

夏目漱石の小説は高い倫理観を持って書かれていると言われている。「坊っちゃん」も自分の生き方、正義を貫き通すため、教師の職を失うことを承知の上で、権力者の「赤シャツ」やそれにへつらう「野だいこ」と戦った。「坊っちゃん」のような人よりも、ある程度の理不尽さを受け入れる世渡り上手な人の方が最終的には得をする。しかしそういったことに目をつむり、歯をくいしばり必死に生きる「坊っちゃん」になぜか惹かれてしまうのは、きっと誰もが心の奥底では自分の気持ちに正直でありたいと思っているからだろう。

このような「必ずしも正義が勝つわけではない」という不条理は、日本にとどまらず、世界に共通する普遍的な現象で

あるといえるのかもしれない。

私の好きな海外文字に、サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」という本がある。私には、その主人公のホールデンと「坊っちゃん」の姿がどうしても重なって見えてしまうのである。正しく純粹に生きることを尊び、そういうものから程遠い世の中の現実と向き合おうとしたにも関わらず、結局はうまくいかなかったホールデンと「坊っちゃん」は、とても似通っている。

「清濁併わせ呑む」というのが、大人になるということなのだろうか。私が「坊っちゃん」やホールデンに共感してしまっているのは、まだ中学生だからなのだろうか。

佳作

坊っちゃんと清

成城中学校 2年

鈴木 悠太

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

何だか大変小さく見えた。

「坊っちゃん」という作品の中で清が登場する場面はそれほど多くはありません。「坊っちゃん」が四国に赴任する前に東京で暮らしている間と、赴任中に「坊っちゃん」が清を思い出しているとき、それと物語の最後です。

話の筋にそれほど影響はないものの、物語で主人公を題名のように「坊っちゃん」と呼ぶのは清のみであり、「坊っちゃん」がただの乱暴者ではなくどこか優しさや温かさを感じるのには、清の存在が大きいと思います。

子どもの頃の「坊っちゃん」は親からも可愛がられず、乱暴で行く先が案じられると言われて育ちました。そのような中で下女の清だけが「坊っちゃん」を可愛がり、良き理解者

となってくれていました。「坊っちゃん」も子どもの頃は清を不審に思ったり「気の毒だ」などと言ったりしていますが、特に母親が亡くなってからは、誰が何と言っても変わらさず自分を肯定してくれる清が近くにいることで、安心して暮らすことができたのだと思います。

父親の死後、家を畳み住まいは別になっても、おりおり清のところに行っていたのが、物理学校を卒業して四国の中学校に赴任することになり、いよいよ本当に清と別れることになりました。出立の日、朝からいろいろ世話をやいてプラットフォームで別れるまでの間の様子に、まるで母親のような清の「坊っちゃん」への愛情の深さを感じます。

そしてその章の最後の「何だか大変小さく見えた。」という一文から、「坊っちゃん」自身の寂しさと、清への思いやりが伝わりました。「坊っちゃん」も、清の年齢を考えるともしかしたら永遠の別れになるかもしれないと考えたであろうことや、この後の清をとて心配していることがうかがわれます。悲しみをこらえ、寂しいけれど温かさを感じる場面を良く表していると思います、この一行を選びました。

「坊っちゃん」は江戸っ子のべらんめえで、口は悪いけれど正義感が強く、冒頭に書かれているように無鉄砲な性格です。だからこそ、この話は読んでとても爽快な気持ちになります。そんな「坊っちゃん」ですが「手紙を書くのが大

きらいだ。」と言いながらも、清が心配しているだろうと手紙を書き、下宿先のお婆さんが「坊っちゃん」に奥さんがいると勘違いするほど東京からの手紙を楽しみにしているところにギャップを感じ、とても面白いです。そして、物語の最後は清が亡くなったことを伝えて終わります。「坊っちゃん」の竹を割ったようなスカツとしたところで終わるのではないことから、清を大切に思う優しい「坊っちゃん」が深く印象に残ります。

佳作

「いまにいろいろなことを書いてやる」
漱石による「おかしみ」の表現について

千代田区立九段中等教育学校 2年

市村 響いちむら ひびき

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行

「いまにいろいろなことを書いてやる」

主人公「坊っちゃん」は「親ゆずりの無鉄砲で子どももの
きから損ばかりしている」と冒頭にあるように、世渡りが上
手ではない。さらに気難しいところもあり、短気でもある。
しかし坊っちゃんの心の奥底には優しさがある。

私が選んだ一行「いまにいろいろなことを書いてやる」は、
坊っちゃんの自宅にいて世話をしてくれていた「清」にあて
た手紙の一部で、坊っちゃんの内面がよく表れている一文だ。

坊っちゃんの優しい部分と気難しさと偽悪的な部分に笑い
をおりませたような絶妙な一行なのだ。なんとも言えず滑稽
味もあり、私はこの場面が好きだ。

父と母に愛されなかった坊っちゃんにとっては、清が唯一
の彼の理解者だったのではないかと思う。坊っちゃんも清が
見送りに来た場面では「もう少して泣くところだった」と表
現している。この一文からも坊っちゃんと清が互いに思い
あっていたことが分かるだろう。また、坊っちゃんは教師を
務めた松山での下宿で、清の夢を見ていた。坊っちゃんは常
に清のことが忘れられなかったのだ。

「いまにいろいろなことを書いてやる」という一文はこれ
からおこるであろう松山での出来事を清に報告すると同時に
期待してほしいという心情が表れている。この手紙がなんと
も滑稽で、一文一文を短く、「くだ」という単純な表現で、
短気でおこりっぽい性格が不思議と伝わってくる。

面白いのは「坊っちゃん」だけではない。登場人物は個性
的で、どの人物も滑稽味がある。大の大人である坊っちゃん
がその他の教師と卵を投げつけ合うなど想像しただけでも
「クスッ」と笑えるような場面がちりばめられている。

漱石が松山で教師をしていたころの実話や経験がもとに
なっていると思われる。漱石は松山に1年しかいなかったが、
きつとこの経験がとても濃いものだったのだろう。

漱石自身について言えば、生後まもなく里子に出され、一
歳で養子になるなど決して両親に愛されて育ってきたわけ
はなかったと考えられる。十四歳のときは実母もなくし、漱

石は自分の過去の面影を「坊っちゃん」に重ね合わせているのではないかと感じる。しかし、むしろ違うところもある。「坊っちゃん」は数学の教師。漱石がこうだったら面白いという空想の産物であり、もしかすると漱石はこんな風に生きてみたかったのかもしれない。

「坊っちゃん」というタイトルは清の立場からの呼び名だ。どんなことがあっても絶対的に愛してくれる存在と自由への理想を描いたのかもしれない。

私ははちゃめちやな「坊っちゃん」が好きだ。したいように、生きたいようにそしてまっすぐに正直に生きていきたい。この一冊をこれからもそばに置いておきたいと思う。

佳作

生きている幸福

筑波大学附属中学校 2年

磯部 暖仁
いそべ はると

作品名 『吾輩は猫である』
選んだ一行

死んでからああ残念だと墓場の影から悔やんでも追付かない

「死んでからああ残念だと墓場の影から悔やんでも追付かない。」

この文は飼った猫である「吾輩」が死ぬ直前に思った言葉だ。どこか人間臭いような一文が僕にとって、最も深く印象に残った。

『吾輩は猫である』では、死ぬことについて頻繁に書かれている。例えば、寒月が研究している題材は「首縊りの力学」で、処刑について演説する場面があったり、「吾輩」の主人である苦沙弥には死ぬときに感じるであろう「苦」という字が入っていたり、等だ。そんな「死」を「吾輩」は頻繁に聞

いていたからこそ、死が来た後に悔やむことがないように、今のうちにしたいことをしようと思えることができたのだ。しかし、皮肉なことに、悟ってしまったことによって、三平君の飲み残しのビールを飲み、酔っ払って、大きな甕の中に落ち、溺死してしまう。それでも最後現実と向き合って潔く「自然の力に任せて抵抗しない事にし」ている。「自ら好んで拷問に罹っているのは馬鹿気ている」と思ったから、このような行動に出たのだろう。しかし、最後に悟り、ビールも飲むことができたから、抵抗しなかったとも考えられるのではないか。また、死に向き合ったからこそ、「吾輩」は、死ぬ時に苦を楽に変えることができたのではないだろうか。

『吾輩は猫である』は一九〇五年、つまり今から一〇〇年以上も昔に発表された。それにも関わらず、現代でも読まれている。人類に限らず、この世に生きる全ての生物には必ずいつか死が訪れる。死は人類にとって永遠のテーマとなっている。したがって、これをとっても細かく、滑稽に描いたからこそ、不朽の名作なのであり、夏目漱石は文豪と呼ばれているのだと実感することができた。夏目漱石は『吾輩は猫である』を通じて、皮肉と死を持つ、世の中を描いたのではないか。そして漱石は、皮肉や死、さらに世の中と共に、生きる意味について読者に考えてほしかったのではないだろうか。

『吾輩は猫である』が発表された年は日露戦争の真只中だ。

国民は戦争のことが気になって日常生活を楽しむことができなかつただろう。そのような人たちに対して、頑張つて生きることの大切さを伝えているのではないか。また、戦争を始めた日本やロシアへの批判の意味もあるのかもしれない。

僕は生きることの目的とは何か幸福を見つけることだと考えた。苦沙弥にとつては細君や迷亭たちとの会話が楽しかつたはずであるし、「吾輩」にとつても人間観察や三毛子が生きがいになつていたはずだ。

僕も毎日を楽しんで、力一杯に生きようと思う。生きていくとは非常に魅力的なものだとこの一文から感じられた。

佳作

ストレイシープと女性の人権

筑波大学附属中学校 1年

平野 ひろの 恵太郎 めぐたろう

作品名『三四郎』
選んだ一行

ストレイシープ

美禰子の発した「ストレイシープ」という言葉は英語である。私はその単語をどのように翻訳したらいいのか非常に悩んだ。シープというのは羊であるが、私にとって羊はあまり馴染みのない動物だ。チーズ、ジンギスカン料理、猛獣の餌食になってしまうものすごく弱い存在である。そして必ずしも賢くて飼い主のお気に入りで仲良くなりそうな動物とも思えない。私は動物園で羊に触れあつたことがあるが、人間になつているようには思えなかった。目の動きが悪いため外敵から身を守るために群れを成して左右を確認しあうのだという。私の中の羊はまったく無力であるということだ。そしてストレイというのは迷つたという意味だ。

熊本の高校を卒業した小川三四郎は上京し下宿生活を始めた。東京は限りなく広い大都会で、チンチン電車が縦横に走っており、どこに行くのにもそして美禰子に会いに行くのにも便利であった。でも田舎者の三四郎は最初から迷子のように東京の町をさまよっている。

三四郎にとって美禰子は初めて好きになつた女性だったかもしれない。でも三四郎はこの女性を好きになつてはいけなさと最初は感覚的には思っていたのではないか。あまりにお嬢様すぎてわがままだから付き合ふことができないと思つたかもしれない。この段階で三四郎も好きになつていいのだろうかという迷つた羊の状態だと思ふ。

美禰子も三四郎になんとしても自分の心情をわかつてもらいたいとまでは思つてなさそうだ。読み進めていくうちに美禰子が誰のことを好きなのかもかすんでしまつた。三四郎のことを三分の一、野々宮さんを三分の一、それ以外の男性を三分の一といった感じである。この人しかいないとか駄目だという意思を明確には美禰子は示さなかつた。それとも示すことはできない状況だったのだろうか。当時、女性の地位は決して高くなかつた。一方で華族制度もあつた。庶民出身の三四郎はすごく優秀であることは間違いないし、将来も約束されているのかもしれない。けれど美禰子にとっては純真で駆け引きがうまくない23歳の青年はとても自分の将来の夫と

して付き合っていく勇氣もなかったのだと思う。三四郎にとって、それはとても残酷なことであると思った。そして「そんなに生意気に見えますか？」と三四郎に聴いている美禰子も自分のことを周りの男性がどのようにみているかもすごく気にしているか弱い女性の一面もある。

私は、三四郎も美禰子もそして野々宮さんも実は将来のことに大変不安を感じながら生きているストレイシープであり、そのために女性である美禰子には特に強力な後ろ盾が必要になることを暗示しているのではないかと感じた。それが当時の社会であり今とは大きく違うことだと思った。

佳作

「本物」の価値

日本女子大学附属中学校 2年

神田 かんだ 晴花 はるか

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行

あの金鎖りは贗物である。赤シャツは誰も知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知っている。

坊っちゃんという呼び名は男子を敬って呼ぶ以外に、甘やかされて育った世間知らずな人を意味する。実際、松山に赴任した当初坊っちゃんは世間知らずで、松山中学校で赤シャツなど表面的な論法ばかりを繰り返す「偽物」だらけの社会を知った。そこで出会う人々から人間の裏表を学び、自分にとっての正義を考えさせられるのだ。汽車を待つシーンで、坊っちゃんが「俺は赤シャツの金鎖りが偽物だと知っている」と心の中で呟いたのは、偽物だらけの社会でもそれを見過ごさず、自分の中の「本物」と「偽物」をあいまいにしないためだ。しかし坊っちゃんは江戸っ子で負けず嫌いのため、虚

勢を張ることがある。虚勢を張るということは、赤シャツのように嘘をつくのとあまり変わらないかもしれない。それでも「何のために嘘をつくか」が全く違うのだ。赤シャツは自分の見栄、利益のために嘘をつくが、坊っちゃんは自分の誇りを守るため、真っ直ぐで義理人情を大切に作る人間でい続けるために虚勢を張るのだ。様々な経験をする度彼が思い出すのは「清」で、下女の老婆ではあるがその誠実さ、善良さこそが大切なものであると気付く。赤シャツやマドンナは表面的な美しさや地位の高さで周囲からは高く評価されているが、その打算的な行動から坊っちゃんは「偽物」だと見抜いた。打算だらけの社会で、真に価値あるものを見極め、例え他から非難されても自分の心に従い正しいと思うことを貫くことこそ、坊っちゃんにとっての正義であり、その正義を信じ肯定してくれるのが清の存在だと思う。偽物がはびこる現実社会において、周りの人々に理解されなくても、自分が敬愛している人、そして自分の愛情自体にも誇りを持って「坊っちゃん」と呼び続ける、そんな「本物」である清の気質が坊っちゃんが自分の正義を誇る根幹になっているのではないだろうか。誠実で善良な清がほめてくれた「本物」の人間でいるため、理屈では示せない「『真心』が示す正しさ」を守るということこそ、坊っちゃんを坊っちゃんたらしめる彼の正義の源なのだと思う。この小説のテーマは勧善懲悪という前時

代的なテーマだが、前時代的だからこそ、赤シャツや野だいが語るような付け焼き刃の「偽物西洋」ではなく、古くからある揺るがない「本物」である坊っちゃんや清が持っているような日本的で純朴な美徳が際立つのだ。誰かの意見や流行、損得勘定に振り回されて、自分なりの美徳はすぐに見失われてしまいがちだ。「偽物」だらけの社会で今一度「本物」を見直すべき、という坊っちゃんのメッセージが深く心に残った。簡単なことではないが、誰に否定されようと私は「本物」だ、と胸を張って生きていきたいという力強い思いがわいてきた。

代的なテーマだが、前時代的だからこそ、赤シャツや野だいが語るような付け焼き刃の「偽物西洋」ではなく、古くからある揺るがない「本物」である坊っちゃんや清が持っているような日本的で純朴な美徳が際立つのだ。誰かの意見や流行、損得勘定に振り回されて、自分なりの美徳はすぐに見失われてしまいがちだ。「偽物」だらけの社会で今一度「本物」を見直すべき、という坊っちゃんのメッセージが深く心に残った。簡単なことではないが、誰に否定されようと私は「本物」だ、と胸を張って生きていきたいという力強い思いがわいてきた。

社会学者・夏目漱石

北鎌倉女子学園高等学校 2年

秋山 あきやま 美萌 みめ

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しい
と云うのは自分で火をかんかん起こして暑い暑いと云うよ
うなものだ

漱石は至高の文学者であると同時に優れた社会学者でもある。それは随筆や評論の中に色濃く、或いは各方面から請われて行った講演で、文学論を論じるよりも当時の社会情勢を洞察し、鋭く指摘するような話が多かったことから窺える。明治四十四年、「現代日本の開化」と題されて和歌山で行われた講演では、当時の文明開化の最中にあった日本社会を分析眼を持って俯瞰し、一般聴衆に分かりやすく説明した。漱石はこの講演で「開化が進めば進むほど生活は困難になる」

と指摘したが、百年以上経った現在、この発言はみごとにほど現実味を帯びている。

また、文学作品では、登場人物の人格を借りて世相を語ることもあったが、「吾輩は猫である」などの代表作でも社会学者・夏目漱石が顔を見せる。一人称の語り口で書かれているものの、猫というフィルターを通してゆえに安心して社会を批判することができたのかもしれない。特に第六話の冒頭は、猫・吾輩による人間社会の見方・捉え方の独演会である。その中で私が、否応なしに注目せざるを得なかったのは「自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかんかん起こして暑い暑いと云うようなものだ」という一行だ。

私はこの感想文を八月初旬に書いている。ここはエアコンが効いていて快適に保たれているが、一歩外に出れば体温を超える気温が身の危険を感じさせる。漱石は、人間が自分勝手にものをつくって困っていると、今私たちが直面している状況を見事に言い当てた。豊かさのバロメーターとして捉えられてきた物質主義は、製造物そのものが、また生産過程で放出される有害物質が地球を汚染し続けている。日本は地震大国であるが、津波などの要因を除けば、命を落とす被害者の死因のほとんどが人間が自らつくった構造物によるものである。また、比較対象として使われた言葉ではあるが、

自分で火を起こして暑がっているとも言おう。ただ、人間活動の物質的文化を支えているのは電力であり、それをつくり出すにはどうしても大量の火力が必要なのである。工場のラインで組み立てロボットを動かすのも、自動車で移動するのも火力に頼らざるを得ない。漱石の指摘通り、最早人間は火を起さねば生活を維持できなくなってしまうているのだ。窓の外では、茹るような暑さの中、元来陽光が好きはずの植物の葉が項垂れているように我が目を疑う。

漱石が生きたのは明治時代、今と比べればまだまだ地球はありのままの姿であったろう。それでも、社会の変化に敏感に反応して先の先の時代まで見通せている。これは、漱石が人間の内面を鋭くえぐることができ、人間の行動はそういった内面の心理によって突き動かされた結果であるからに他ならない。私たちは漱石を別の視点で学び直すべきだ。社会学者・漱石の文章や発言は、人間の心理を掴み、時代を超えて普遍性を持つものだから。

審査講評

社会学者・夏目漱石という視点がユニーク。漱石の文明発達に対する批判的な視点を理解し、現代の物質文明の行き詰まりを読み解いている。

朝日新聞社賞

汚れの意味

成蹊高等学校 2年

ながしお
長汐 ちあき
千有希

作品名『ころ』

選んだ一行

「カラヤカフスと同じ事さ。汚れたのを用いる位なら、一層始から色のついたものを使うがいい。白ければ純白でなくっちゃ」

「ころ」の中で、先生は叔父に騙された時に自分の素直さを後悔していた。騙されたと気づいた時を手紙の中で振り返った先生は「私はその時の己れを顧みて、何故もつと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、正直過ぎた自分が口惜しくって堪りません。然しまたどうかして、もう一度あいう生れたままの姿に立ち返って生きてみたいという心持も起ころのです。」と語っている。この言葉を見た時、私は「選んだ一文」を思い出し、この一文が私の心に刺さった。裏切られたことで彼は純粋ならば純白のまま、性格が悪くなるくら

いならいつそ最初から腹黒い方がいいと考えるようになったのだ。そこから、初めから白いものは純白なまま、色のついた物なら汚れても気にしないという精神に至ったのだ。

先生の言葉に共感する一方で、私は疑問に思うことがあった。何故先生は「私」に秘密を与えてしまったのだろうか。先生は綺麗な部分しか知らない妻の記憶に、私宛ての手紙に書いたような先生の秘密が入って汚れてしまうのを懸念していた。つまり、先生の記憶というものは彼にとって「汚れ」と感じるようなものなのだ。そして妻同様に「私」も相当純白である。「私」は自分で自分のことを真面目だと答えるし、景色に気を取られて先生を遣り込めることを忘れてしまったり、先生や家族の答えにくい質問には嘘をつかずに黙り込んでしまう。そんな彼に、妻にも教えてはいけないような大きな秘密を教える仕舞うことで先生の記憶を独りで一生背負わなくてはいけなくなる。妻に聞かれたら元来純白な彼は先生との約束を守るために嘘をつかなくてはならない。では、先生はなぜ「私」の記憶を汚すこと、彼の精神に反する決断をしたのだろうか。

私は、この疑問が浮かんだ時に江戸時代の「暖簾」を思い出した。この時代の寿司屋の暖簾には黒い汚れがあった。これは店に入る際にその店の暖簾で手を拭く習慣があったからだ。たくさんの人がその暖簾で手を拭くことでできた汚れは、

その店の人気度を表す。その汚れは意味を持っているのだ。このことを先生の秘密に当てはめると、妻の中では事実にはかならないが「私」の中で意味を持つと言うことになる。自分から意味を持ちたがった、色をつけたがった「私」には汚すと言うことが当てはまらなかったのだろうか。

ところで、白いものと聞かれて真っ先に思いついたのは「ころ」であった。今年、新潮社はプレミアムカバーの真っ白な「ころ」を出版した。この本を手にとった時、この白さを白いままにしたいと思った。だから私は先生の考えにとても共感したのだ。だが、読み終わってから、カバーにつく汚れも愛せる気がした。その汚れは私と「ころ」の旅の日記なのだ。いつかまた手に取ったその日に私に「意味」を教えしてくれるから。

審査講評

江戸時代の寿司屋の暖簾のたとえが秀逸で、このエッセーを特徴づけている。最後の白いカバーの記述も余韻を残し、全体に完成度が高い。

私が思う漱石の人間性

光塩女子学院高等科 2年

岩崎 いわさき
安音 あのん

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行

そんなら死なずに生きていらつしゃい

私はこれまで文学作品というものにあまり自ら触れてこなかった。もちろん授業で扱う機会があれば先生の解説を参考にしながら、作者は作品を通じて何を読者に伝えようとしたのか、どんな意図を込めて書いたのかについての深い推察は行ってきた。そんな私にとって、漱石の作品「夢十夜」「変な音」は、今なお強く印象に残っている作品である。どちらの作品もそれぞれ場面の情景がありありと頭に浮かび、想像力を掻き立てる細かい描写が実に魅力的だ。儂い美しさがあるが、どこかアンバランスで不気味、神秘的で、私は読む度に不思議な世界へ誘われる。読み終えた後は、満ち足りた感覚が私の中で長く残った。そんな深く感銘を受けた作品だが、

今一つ私は漱石の人物像が掴めなかった。ここまでの作品を創りあげた漱石はどんな人間なのか…。そんな疑問を抱きながら読んだ漱石の随筆「硝子戸の中」に、彼の人格が色濃く表れていたのである。

私が選んだ一行は、その中に書かれている「そんなら死なずに生きていらつしゃい」だ。これはある日漱石の元を、自分は死んだ方が良いのではないかと疑問に感じた一人の女性が助言を求めて訪問した際、漱石が投げかけた一言である。この女性はそのまま生き続ければ、「時」の流れの所為で過去の大切な思い出が薄れていってしまうのが恐ろしく、辛いと告げる。彼女は命と等価、もしくはそれ以上の価値がある記憶を「時」が知らぬ間に奪い去ってしまうと怯えているのだ。私たちは、あの頃に戻りたい、あの時あすれば良かったと過去を振り返ることがある。また今の幸せがいつか消えて無くなってしまうのではないか、いずれ大切な人と死別し今ある環境が大きく変化してしまうのではないかと、「時」による変化を恐ろしく思う。彼女の嘆きには、漱石のみならず、私たち読者の心を揺さぶるものが存在する。しかし漱石はただ無遠慮に、軽々しく生きろと述べたのではない。漱石は彼女の些細な言葉の変化を瞬時に感じ取り、すかさず返したのがこの一言なのだ。私は思う。女性は、漱石に送ってもらうことを「勿体のう御座います」と、はじめは表現したが、

「勿体ない訳がありません。同じ人間です。」という漱石の言葉を受けて、「光栄で御座います」と言い換えた。前者には、謙ったり自分を卑下したりする意味が含まれるが、後者からは、相手への尊敬や、好意に対し嬉しく思う気持ちなど前向きな心情が伝わってくる。ほんの小さな変化だが、女性を観察し、言動を注視して投げかけた言葉は実に彼らしく、私は晴れ晴れしい良い気持ちになった。この一文は漱石の、作家として、一人の人間としての真っ直ぐな誠実さ、他者へ配慮がよく現れ、それ故に私の心を魅了したのだ。私は何度この章を読んだらうか。この一行に込められた、漱石にしか出せない清らかな思いやりは、これからも私の心を優しく包み、生きる希望を示し続けるに違いない。

審査講評

随筆の文章を細やかに読み取り、掴み難かったという漱石の人間像を自分なりに構築していくプロセスがしっかり書けている。

新潮社賞

結局、恋か。

東京都立桜修館中等教育学校 2年

平野 真生

作品名『ころ』

選んだ一行

然し……然し君、恋は罪悪ですよ。解っていますか。

「恋は盲目」という言葉がある。意味を調べると、「恋に落ちると、理性や常識を失ってしまうこと」とある。語源はシェイクスピアの本の一節からきているそうだ。まさに「先生」の過去にピッタリな言葉だろう。しかしここで「先生」は「恋は罪悪」と語っている。なぜ「先生」は「罪悪」という言葉を選んだのだろうか。果たして「恋は罪悪」だろうか。「先生」は物静かで言葉を発するときはいつもよく考えてから話している。しかしこのセリフでは少し躊躇しているものの、深く考えずにポロリとこぼれてしまったセリフのようにとらえられた。恋の話をしているこの一場面では特に「先生」の冷静さが欠け、後のことを考えずに話している。実際

にこの後の会話は「私」にとって中途半端に焦らされているだけで不完全なものとなってしまっている。やはり「先生」の過去の出来事は常に「先生」の中で暗い影を落とし、罪の意識が消えないでいるのだろう。英語教師をしていた夏目漱石のことであるから、シェイクスピアの「恋は盲目」という言葉も知っていただろう。それでも「罪悪」という言葉を選んだのには取り返しのつかないことをしてしまった、死という「事実」を知っているからだ。この先の物語で「先生」の過去が明かされ、恋によってその後の人生を大きく変えたことがわかる。この言葉を発した時、「先生」は何を思ったのだろうかと考えた。過去のことを思った後悔だろうか、同じ過ちを犯してほしくないという希望だろうか。「解っていますか」という強い念押しは「私」にだけでなく「先生」自身や私たち読者にも問われているように感じた。

また私がこの本全体を通して感じたことは「結局、恋か。」という少しの落胆である。読書をしている中で恋が人を変え、る場面によく出会う。そのたびに恋の影響力がなぜそれほどにも大きいのか理解できず、消化できないままである。そして長年愛され続けた小説さえも恋が人を変えていた。なぜ時代を超えてもお、恋という題材がこんなにも人の心を揺さぶるのだろうか。それは「恋は罪悪」であるからではないだろうか。確かに恋は「先生」のように人を傷つけ、傷つけられ

るかもしれない。しかしその可能性があるのに人は恋をやめられない。一時の楽しくて儂い、美しい時間を過ごすのがあまりにも魅力的であるのだ。だからこそ余計に罪深い。だからこそ人は恋を愛する。「先生」は、夏目漱石は、このことを知っていたのだろう。

審査講評

「恋は罪悪ですよ」と言う先生の心情に思いをさせて、最後に書き手が吐き出す言葉「結局、恋か。」は、恋に愛憎半ばする思春期の生徒の、実直な感想だろう。

東京理科大学賞

つながりから得る幸福

光塩女子学院高等科 2年

佐伯 理奈

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行

然しそれだけにしたところで私には満足なのである。「貴方の講演は解らなかつたそうです」と云われた時よりも遥かに満足なのである。

「硝子戸の中」は、病を抱えた漱石が自宅で療養をしながら、晩年の日常やこれまでの人生の思い出を、静かに、誠実に綴った随想集だ。つぶさな描写と丁寧な心情表現から当時の街の景色や漱石が関わる人々、出来事を鮮やかにイメージすることができる一方で、漱石の周りにあった数多の別れと彼の死に対する考え方を私たち読者は知る。「死」が散りばめられている随想たちを、私は寂寥感と同時に、漱石が「死」に馴染んでいくような錯覚すら覚えながら読み進めていった。

そのなかで燦然と輝き、私の心に刺さったのがこの一文だ。断れない義理があつて講演の依頼を受けた漱石が、過去にもあつた同じような機会です学生たちの利益になるように話したが、「何でも解らなかつたようですよ」と言われた経験から、今度は、より一層分かりやすく話すことを強く意識して講演に臨んだこと、もし分からない点があつたら自宅に来てくれてもいいと伝え、実際に三人の学生を招いて真摯に説明したことが書かれている。「誰かに伝えた」、「誰かと心を通わせる機会を持った」出来事を経て得られた満足感、安心感がこの一文に見られ、漱石の素直な喜びが私にも伝染した。「夏目漱石ほどの人でも」と言ってしまうと語弊があるかもしれないが、知識が豊富で理路整然した思考回路を持っているように見られる漱石が、そして、彼自身が不安、不透明、不愉快と著しているこの世の中において、ふと見せた幸福な心持ちは、自分の世界である硝子戸の内側から外の世界の様子を俯瞰で見ている漱石とは明らかに違う一面だ。義理に厚く他人の役に立ちたいと願う世話焼きな漱石を感じさせた。

漱石が亡くなってから百年以上経た今も、世の中は不条理で不確かだ。時には、無力な私たちを容赦なく叩きのめするような出来事が起こり、痛みと深い悲しみを与える。懸命に生きていくことが無意味に感じる瞬間すらある。しかし、生きていくことは決して苦しいことばかりではないことを漱石は

教えてくれている。売れっ子作家という社会的に成功した姿や、類い稀なる文才について語るのではなく、他者とのつながりで得た幸福と充足感を晩年の随想に記し、人生を豊かにする方法を私たちに遺してくれているように感じた。

私は漱石のこの一文を胸に刻み、他者との関わりから学び、他者のために行動し、他者と心を通わせることに努めていこうと決めた。これこそが、私たちが生きていく目的であり、人生においての「光」だと感じたのだ。壁にぶつかったり、傷ついたりすることがあってもあきらめず、つながりから得る幸福を求めて私の道を力強く歩んでいく所存だ。

審査講評

社会の不条理な出来事を俯瞰して捉えることで、自己と他者（社会）との関りから学び、他者と心を通わせることの中に幸福を見出すことに価値があると気づいている。

二松学舎大学賞

現代に潜む「寂しみ」

東京都立桜修館中等教育学校 2年

渡辺 わたなべ 結衣 ゆい

作品名『こころ』

選んだ一行

自由と独立と己とにみちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの寂しみを味わわなくてはならないでしょう。

「自由と独立と己とにみちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの寂しみを味わわなくてはならないでしょう。」これは、夏目漱石の「こころ」という作品で登場人物の「先生」が「私」に対して話した言葉の中の一行である。私が初めてこの文章を読んだときは、自由に満ち溢れていることで様々なことが制限なくできるはずなのに、何故寂しさを味わうのかと疑問に思っていた。しかし、「こころ」を最後まで読み終えたときにこの一行に深く納得し、先ほどの私自身の疑問の危険さを感じるとともに、著者である夏目

漱石がこの作品を通して伝えたかったことの一つなのではないかと感じたため、この一行を選んだ。この作品の時代設定は明治時代から大正時代への転換期であり、「先生」及びその友人であった「K」は近代化の渦中にいた。彼らの死は決して恋に破れて悔しかった、罪悪感があるなどといった単純なものではなく、「寂しさ」というこの時代特有の複雑なものが含まれていると考える。私が選んだこの一行にある通り、近代化すると西洋から日本に、個人や自由を尊重するという新しい考えが入ってくる。彼らはその考えを嫌でも受け入れなければならず、自我意識に目覚めつつも、閉ざされた空間の中で理想と現実の矛盾に苦しみ、孤独感・寂しさを感じていたのだ。

夏目漱石は、文明開化以降に個人主義・資本主義社会の下での競争が激化し、その結果人々を孤独にさせるということをこの作品及びこの一行を通して示唆している。西洋の文化が入ってくる前までは、何をすることも周りの人との協力が必須で、「自由・独立・己」などといったことは考えることすらできなかった。しかし、近代化により物質的に豊かになったことで人々は「自由・独立・己」を得る。そしてそれが当たり前になり、一人で何でもできるようになると「己さえ、自分さえよければ」という思考が生まれる。その結果、古来の日本人が大切にしていた、人同士の繋がりが薄くなったの

だ。

これは現代にも言えることであり、最初に述べた私の疑問がそれを如実に表している。ほとんどのことが困難なくできる便利な世の中において、SNSというものは、「自由・独立・己」を得たことの代償となる「寂しさ」を紛らわす手段の一つなのだ。しかし、私たち現代人はこの「寂しさ」に気づいていない。気づいていたとしても見て見ぬふりをするのだ。「寂しさ」を完全になくすことは、便利な世の中において不可能である。しかし。だからといって落胆するのではなく、今を生きる私たちは「寂しさ」を認識し、しっかり向き合う必要があるのだ。

審査講評

近代化とともに自由や個人の尊重が重んじられる一方で、人々が孤独になることを読み取っている。そして孤独や寂しさが現代の自分たちの問題でもあることをよく認識している。

くまもと賞

一番信じられないのは

白百合学園高等学校 1年

よしだ
吉田 そら

作品名『ころ』

選んだ一行

人間全体を信用しないんです

「ころ」を読んで、私が一番衝撃を受けたのは「人間全体を信用しないんです」という一行だ。これは主人公が「先生」と慕っている人物が、出会って間もなく言い放った言葉だ。先生はいつも周りに壁を作って心を開かず、孤独で、暗い過去を背負っている人だった。常に人を寄せ付けない雰囲気があり、「他人を信用しない」というのがよく当てはまる人物だ。そんな「他人に対する不信感」を募らせている先生だが、物語を読んでいくうちに、その「不信感」は他人に向けたものだけでなく「自分自身に対する不信感」が大きいことがわかった。他人だけではなく、自分自身までもが信じられなくなってしまった先生の心の闇を探ってみたいと思っ

た。

先生は若い頃に両親を亡くし、その時に叔父に財産を奪われて人間不信に陥る。特に信頼していた親戚の裏切りは深い傷となり、故郷とも絶縁、若い頃から孤独を背負うことになる。この時から「人を信じたら裏切られる」というトラウマを抱えて生きていたのだろう。人を信じず孤独に耐えた青年だったが、下宿先のお嬢さんに出会い恋心を抱き、少しずつ人間らしい感情が芽生えていく。しかし、同時に親友のKも思いを寄せていることを知り、焦りや不安、嫉妬心から親友を裏切り、強引にお嬢さんとの結婚をすすめてしまう。Kは失恋のショックで自殺してしまうのだが、そんな状況でも自分の卑怯さが周りにばれることを案じ、自分の世間体を気にする身勝手で醜い心情が描かれている。

かつては親戚の裏切りにより傷つき人間不信に陥っていた先生が、一転して自分が大切な親友を欺き、死にまで追いつめる醜い人物に豹変していく。親友に対する良心がすっかり欠如し、おぞましい感情に支配される自分に恐怖と驚きを感じ、自分自身への「不信感」を募らせていくのだ。この時の変化を「平生はみんな善人だが、急に悪人になるから恐ろしいのです」と語っている。自分はそうはならないと思っても、一時の心の弱さで悪にも転じる。動揺から自分を見失い、モラルに反した言動を次々と起こす姿は哀れに見えた。

人間は良心と利己心、善と悪の間で葛藤し、どちらも紙一重であると痛感した。

「人間全体を信用しないんです」という言葉は、他人に対する不信感というよりも、自分自身が良心を無くし、身勝手なふるまいをしてしまったことへの戒めの言葉ではないだろうか。親友を死に至らせ罪悪感を背負う先生が、一番信じられないのは自分自身であり、一番恐ろしいのは自分自身の心の弱さだと訴えているように感じる。嫉妬や憎悪、不安や焦り、そんなネガティブな感情は人間ならだれでも抱くことがあるだろう。しかし、負の感情で自分自身を見失うことなく、悔いなく乗り越えなければならぬというメッセージを強く感じる作品だった。

審査講評

テーマの捉え方とスムーズな展開が目をひいた。「人間全体を信用しない」という言葉から先生自身を責めていることを読み取り、自分自身の在り方を考えている。

佳作

時の両義性

光塩女子学院高等科 2年

印出井 彩

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行

公平な「時」は大事な宝物を彼女の手から奪う代りに、その傷口も次第に療治してくれるのである。

生と死。それは対極でありながら、常に表裏一体である。生は些細なきっかけで、いとも容易く死に転じてしまうこともある。私達は、連綿と続く生を当たり前のこととして生きていくが、その中で、この先も生きるべきか死ぬべきかの判断の境界が曖昧になる時がある。

漱石のもとを訪ねたある女はまさにこの状況にあり、敬愛する漱石に、自分の話をした後で、生きるか死ぬかの判断を執拗に求めた。漱石は、命が関わる判断を自分が下すべきではないと考え、生きるか死ぬかの明確な答えを出さずに女を帰そうとしたが、別れ際に女が漱石に向けて言った、彼に送っ

てもらおうことを「光栄です」という言葉に対し、「そんなら死なずに生きていらっしやい」と返答した。その後、漱石はこの女との一連の出来事について人間らしい心持ちを感じ、「時」について考えを巡らせている。私が選んだ一文はその中にある。

漱石は、時が持つ両義性について、宝物のような生の歓喜を奪う残酷な面と、その歓喜に伴う苦痛を和らげる治療の面があると述べている。漱石を訪れた女は恋をしていた。恋愛は幸せなものだった。しかし、彼女と恋をしていた男が亡くなり、彼女は燃え上がるような生における喜びをこのまま生き続けることで失うのを恐れるようになる。漱石に生きるべきか死ぬべきかという判断を仰いだのは、とりも直さず、その喜びが薄れていくのに耐えながらこのまま生きていくのか、今死んで幸せな気持ちのまま生涯を終えるかを問うていることになる。女にとって生き続けることは苦痛そのものであったが、漱石は「そんなら死なずに生きていらっしやい」と声をかけた。それは、時の経過は彼女の苦痛を和らげていくだろうという判断がなされたからであり、加えて、女の中に、未来への希望ともとれる、嬉しいという気持ちや感謝の気持ちがあることに存在していることを、漱石が感じ取ったからだ。

私は、今回選んだ一文から、時が圧倒的な力を有するのは、

それに抗えないからではなく、それが漱石の言う両義性を持つているからだと思いがつき、時の本質に触れた思いで納得した。時が残酷な力と癒す力という二つの相反する力を同時に持っているという解釈は、人間として生きていく以上合点がいく。生きるか死ぬかの選択は常に自由だが、それでも人が生き続けるのは、時というものが残酷でありながらも誰にとつても公平であるからかもしれない。

これから生きていく上で、私もあの女のように苦悩する日が来る可能性は大いにあるだろう。世の中には死を選択する人がいるのも事実だ。しかし、私には漱石の言葉がある。私の心の中の漱石は、時の両義性を私達に指し示しながら、「そんなら死なずに生きていらっしやい」と声をかけてくれるような気がするのだ。

佳作

恋に対する考えについて

東京都立桜修館中等教育学校 2年

井上 元太

作品名『ころ』

選んだ一行

あなたの心はもうとつくの昔から既に恋で動いているじゃありませんか。

恋とは異性に対してだけでなく、異性に向かう前の段階として、まず同性に向かつていくと先生は説明している。物足りなさ、心の虚しさを埋めるために他者に近づくという行為は等しく恋であるとする先生の考え方に驚くともにはずいぶんと寛容で進んだ考え方だと感じた。現代でも徐々に理解されてきたといった程度であり未だ多くの人が抵抗を感じている同性愛について、この文章において漱石が理解を示しうけいれていると感じたからである。明治時代では文明開化において西欧の文化を取り入れていたため同性愛に関して寛容でなくむしろ差別の対象であったはずである。漱石自身も英国

留学をするなど西欧の文化に影響を受けていたはずである。そのような人物が同性に向かつていくことも恋であると考えられていることに驚いたのである。もちろんこの文章中の同性に向ける「恋」とは決して同性愛という意味ではないだろうが、それでも私は漱石が同性愛に対し抵抗を持っていないと感じざるを得なかった。そして、文化や時代に囚われず普通の人々が理解できないようなこと、抵抗を感じてしまうものに対して寛容になり理解することができるということが人の心に響くような作品を生み出すことにつながるのだろうかと思つた。私がこの文章を選んだ理由はそれだけではない。今まで心の虚しさを埋めるために他人にすがりたいという気持ちを経験したことはあったが、その現象に名前があるとは思いつしなかった。しかし、それが恋なのだと言われると何だか妙に納得することができた。恋愛対象でない性別の人間と仲良くすることと、恋愛対象である性別の人間と仲良くすること、に線引きをし、後者だけを特別視することに疑問を持つていたが、この一行を読んで明確に線引きできるものではなく根本は同じなのだとわかった。私には正直同世代の人が言うような、そして恋愛小説などで読むような異性に対する恋というのを明確に掴めずにいた。しかし、同性に近づく、すがるという行為の先に異性との恋があるのかと考えると以前よりも明確に恋というものを捉えることができる気がしたのであ

る。この作品を読んで、そしてこの一行にであって「恋」というものが何なのかについて深く考えさせられた。たとえ一般に言う恋愛をせずとも同性に惹かれるだけで恋であるのなら、人間にとって恋とは絶対に切り離せないものなのだと思う。私にはまだ恋が何なのかについて明確な答えを出すことができないが、これからの人生でそれを見つけていきたい。この本は恋を考える良いきっかけであった。

佳作

一人の淋しさ

東京都立桜修館中等教育学校 2年

井上 成美
いのうえ なるみ

作品名『ころろ』

選んだ一行

私は仕舞にKが私のやうにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと、同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横通り始めたからです。

Kが自殺を凶つたシーンは、とても衝撃的だった。平凡でも幸福だった日常を少しづつ変えていく「何か」。それははっきり視認することはできないが、それは確実に日常に暗い影を落とす。先生とKの歯車が噛み合わなくなり、やがて取り返しをつかない、人生に大きな影響を与える悲劇が訪れる。きらきらした青春が崩壊する瞬間が、刹那的に、でも瑞々しく切り取られていて、それなのに「何か」が常に体にまとわりついているようなぞわぞわした感覚を感じた。だが、

私が選んだのは、そんな印象的なシーンの後の一行だ。

私は、Kが自殺を図った理由についてただ、失恋し、親友に裏切られて失意の念のまま死んでいったと思っていた。だから、初めてこの文を読んだとき、なかなか内容が頭に入っ
てこなかった。Kがたった一人で淋しくて命を絶った？先生がKと同じ路を辿っている？

私は困惑し、何度も該当のシーンを読み直した。すると、Kには心の内を打ち明けられる人がいなくなったことに気が付いた。Kが心のうちを話せる人は、恐らくお嬢さんと奥さん、そして先生の三人に限られていた。実の両親とも義理の両親とも連絡が取りづらく、恋路の張本人であるお嬢さんとその母である奥さんにはまさか話せまい。すると、やはり一番の友人である先生しか頼れなかった。だが、その彼に恋をあきらめるよう強く責められた。両親との確執や生来の自分を追い込む性格、そして苦しい恋などによりかなり気を張って生活していたところに、唯一頼れた先生に突き放された。彼から否定され、心のよりどころがなくなり、はっと一人になったと感じたのだろう。

では、Kのその感情が先生と同じとはどういうことか。最後まで読むと、先生の境遇もKと似たようなものだったと感じた。彼も家族を亡くしており、何かを相談する相手というのは奥さんとお嬢さん、そしてKしかいなかったのだ。だが、

K亡き後、自分が彼を死に追いやったと自責の念に囚われる彼は、その気持ちを亡くなったKは勿論、お嬢さんや奥さんにも打ち明けられず一人でずっと抱えてきた。Kがこの世から去ったということは、彼から許される機会を永遠に喪ったということだ。また、許しをくれるであろうお嬢さんには、彼女の純真な人生を一滴でも汚したくないという彼自身のエゴにより打ち明けられない。そんな一人で抱えるには重すぎる感情を一生抱え続けなければならぬという事実は、自分を否定し、淋しさを感じるのには十分すぎる理由だ。また、Kの「覚悟」に感化された部分もあるだろう。最終的に先生もKのように自殺したことを考えると、やはり二人は同じ淋しさを抱えていたと考えられる。

先生とKの関係性は、時間が経つほど歪で他人の介入を許さないものになっていく。「こころ」の中で、ひっそりと、でも確かに描かれる、静かに狂っていく人間の様が、私が感じた「何か」なのだろう。

佳作

先生の選択

東京都立桜修館中等教育学校 2年

檜山 ひやま 葉奈 はな

作品名『ころ』

選んだ一行

「世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。」

「世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。」
先生が遺書で述べたこの言葉には、先生が感じていた心の孤独、そして過去への自責の念が込められているように感じられる。

先生は同じ人を好きでいる親しかった友達を裏切つてまで、深く愛していた女性を手に入れたかった。文章からは先生が自分の良心を見失いながら必死に彼女を追い求めていた様子が伺える。しかし、その理想が現実に叶った直後、彼は

その友達の死を迎えた。自分の幸せのために行った行為が他人の不幸へと行きつき、終いには愛している人が一番近くにいても、埋め尽くされない孤独を感じるようになったのだ。誰にも打ち明けることのできなかつた過去の残酷な真実。それを吐露することにより心の孤独から解放されるはずであったが、先生はその道への選択を何度も躊躇した。私はそれが妻に失望されたくないという自己中心的な責任放棄からではなく、妻を自分と同じような寂寞の沼へと足を踏み込ませないためであったと考える。親類を多く持たず、終日家で家庭に従事していた妻にとって、先生は信頼できる最も大きな存在であっただろう。先生もそのことを理解していたはずだ。だからこそ、虚像とも言える妻の居場所を守り貫くことを選んだのではないか。この複雑な背景は単純な愛によって支えられていたのだと思う。しかし私は、先生が最後に選択し、決心した自ら命を絶つ行為には愛が忘れられていたように感じた。先生は友人の死後から自分自身を信用できなくなり、自分の過ちに対して大きな罪責感を背負っていたことがこの一文にもよく表れている。自分が嫌う自分に鞭を打ち、孤独と負い目から解き放たれる道は先生にとって最も楽な道であったが、残された妻、そして先生を慕っていた主人公はその孤独を引き継いで生きていくのだ。先生の良心の呵責は先生を愛していた人達にとって、やや過大であったようにも感

じられる。私はもし、先生が妻に隠し通していた真実を全て打ち明けても、妻はゆっくりとそれを受け入れてくれたと信じている。なぜなら、彼女も先生がつくる壁を常に感じ、孤独を心の内に秘めていたから。先生の「こころ」は最後まで誰にも見せられることなく、何も感じない冷たいものへと変容して動かなくなってしまうため、愛は最後まで役目を果たさずに終わりを迎え、孤独は連鎖していつてしまったと考えた。

ある出来事により、自分という存在を恨むことしかできなくなつた先生の苦しみは私には凶りかねるほどのものであつただろう。私は人と人の関係では容易に踏み込んでいられない部分があることをこの文章から教訓を得たのと同時に、時には心の壁に一步踏み出し、手を差し伸べることのできる勇氣を持つ人でありたいと強く感じた。

佳作

過去を消化する

東京都立桜修館中等教育学校 2年

四津谷 風よつや なぎ

作品名『こころ』
選んだ一行

私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

「私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。」

私が選ぶ漱石の一行、それは冒頭にあげた、「こころ」に登場する「先生」の、主人公である「私」へ向けた遺書の中の言葉だ。この言葉の後には「先生」の自伝が長々と続く。

初めてこの文章を読んだとき、自分の命をもって自分の過去を語る「先生」の人物像に大げさすぎないかと感じつつ、それでも「私」のことを特別に思っており、自分の過去を語

ること「私」の糧になればと思っっているのが素敵だとも感じた。しかし、後に「先生」の過去が明かされていくにつれ、私の解釈は少し間違っていたのではないかと思ひ始めた。

私にとって、自分の過去を語るのとはとても楽しいことである。たった十七年しか生きていないし、なんなら小学校入学前の記憶はほとんどないので語る事ができるのはほんの十年の歴史である。しかし、この十年で人間関係が、趣味が、学生生活が、なにもかもが大きく変動して今の私を作り上げているのだと思うと、たとえその中につらい出来事があったとしてもそれすらも愛し、誰かにまとめて語ってしまいたくなる。「こんなしんどいこともあったのだよ」「でも私、乗り越えてきたのだよ」と。一種の承認欲求かもしれない。私には、過去のつらい出来事をそのように消化することができる。そして、それを誰かに「すごいね」とか「大変だったね」と共感してもらうことで、つらい出来事から、自分を成長させてくれた良い思い出として完全に昇華することができる。

しかし、「先生」にはそれができなかった。もちろん「先生」にとつてのつらい出来事というのは「友人の死」、それも自分が殺したも同然なのだからそう簡単に消化できるはずがないだろう。人を死へと追いやったことのある自分を肯定するのは簡単ではない。ましてやそれを人に語るなんて、できたものじゃない。しかし、最終的にはそれを、自分の命と引き

換えに成し遂げた。それを漱石は「私は今自分で自分の心臓を破って」と表した。そして、「私」に自分の苦しみを分かち合いたい、共感してもらいたいという思いを「その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです」と表現した。今まで誰にも打ち明けることのできなかった、自分だけが背負っていた罪を、「私」に分け与える。「私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です」という文章には、自分のことを知りたがっていた「私」に自分の過去を打ち明けることで今後の人生の糧にしてほしいという想いだけでなく、ようやく誰かと自分の罪を分け合える、「消化」できるという自分に対する満足も感じる。最初この文章を読んだとき、大げさだけど素敵な表現だなと感じたが、今となつては生々しくどろどろとしたものしか感じないのである。

佳作

信じるといふ勇氣なるもの

長野清泉女学院高等学校 1年

成田なりた 朱里しゅり

作品名『行人』

選んだ一行

「自分のしてゐる事が、自分の目的になつてゐない程、苦しい事はない」

「自分のしてゐる事が、自分の目的エントになつてゐない程、苦しい事はない」という兄、一郎の台詞が印象深かった。それに対してHさんが「目的エントでなくても方便ミイセンスになれば好いぢやないか」と言う。それに対して一郎は「ある目的があればこそ、方便が定められるのだから」と言い返す。兄のこの台詞が象徴しているように一郎は人生の目的が定まらないので何をしても落ち着かないのだろう。そして「方便」という手段をいかに完璧にしても、一郎の心が満たされることはないのかもしれない。

凡人は非凡な人を羨望の眼で見るが、天才は孤独の中で、

他者に理解されず、他者の心を理解できない苦悩を持つ。

この話は、平凡で要領の良い弟である二郎の視点で、非凡で頭脳明晰な兄の一郎の心の葛藤が描かれている。家族の中でも一目置かれていたが、真面目すぎて要領が悪く、世渡り下手である兄の一郎が、自分の心さえ分からなくなり苦しみ悩み続ける。約百年も前の漱石の作品でありながら、秀才にありがちな他者の心が分からないというメンタルの悩みという点では現代にも通ずるものがあると思ふ。

私も仲良しの友達で、たまたま互いの進路の違いなどから、少しずつ心の距離ができ、ついには一言も会話がなくなり、一緒にいることさえ、ほとんど無くなった人がいる。

数学や物理なら公式を用いて解を導くことができる。しかし、人の心の移り変わりは解を正しく出すことはできない。私は一郎のような秀才でも頭脳明晰でもないが、時々、仲の良い友達が何を考えているのか全く分からない瞬間がある。例えば、昨日までは仲良く連絡を取り合っていたのに、休み明けに急にその友達の様子がよそよそしくなっているなどである。

一方で人は「心」という見えない「不思議空間」を持つからこそ、魅力的で機械とは異なると思ふ。

相手の気持ちを探りたくて、様々な話題を投げかけたり、談笑やケンカなどの経験を通じて、相手の個性を知っていく

からだ。もし私に人の心を瞬時に読める特殊能力があり、相手がこうすると喜ぶ、こうすると悲しむと全てが分かっているまっていたなら、私の人生はとてつもなくつまらないものになるだろう。相手の気持ちを推量して行動し、すれ違いながらも笑い合える関係を構築していくからこそ、奥が深いし味わい深い。

この物語で二郎が幸福とは相手を信じることだと言う。根拠なく相手を信じることは、一郎には苦しいことだ。しかし互いに信じ合うことは互いの信頼につながる。私は「信頼」こそが人生で幸せを感じる一つの大切な要素フアクターなのだと感じた。

佳作

自分の醜さ

広島県立海田高等学校 2年

田口 依真たぐち えま

作品名『こころ』

選んだ一行

もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をもものすごく照らしました。

私は、夏目漱石の「こころ」を読んで、「もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をもものすごく照らしました。」という文が深く心に残りました。

この作品は、主人公の私と先生、先生の奥さん、そして「K」という四人が主に登場します。先生が奥さんと結婚する前に、「K」は先生の奥さん、当時はお嬢さんのことが好きになります。そのことを先生に相談した時先生はお嬢さんを取られないたくないという気持ちが大きくなり、「K」のことを欺き、

お嬢さんのお母さんに結婚をお願いし、承諾をしてもらいます。しかし、そのことを「K」に伝えることができず結局お嬢さんのお母さんが私の知らぬ間に「K」に伝えていました。そして希望をなくした「K」は二日後に自殺をしました。私に心に残った一文は、この直後の文です。この文章は、先生の「悲しい」という感情だけでなく、後悔や戸惑い、そして、今後への不安を完璧に表現していると感じました。複数の感情を表現するのはとても難しいのに、この一文で明確に表現している所が夏目漱石の素晴らしさだと思います。

また、私が初めてこの一文を読んだ時、なぜ通常は明るいはずの光を「黒い光」と表現しているのかとても疑問に思いました。「黒い光」の黒は先生の罪の意識にかかわっているのではないかと考えました。自分もお嬢さんを好きなんだというべきだと思う一方で、負けたくない負けそうだと思う自己意識によって、打ち明けるどころか全力で友人を出し抜き、恋を手抜きにした。おじに手酷く裏切られた経験を持ち、故郷と決別したのは、人間の汚い欲、自分が良ければいいという利己心を嫌い「自分はそんな人間ではない」と自負していたからだと思う。しかし、まさにその利己的な心があることを自覚させられた、その大きすぎる代償が友人である「K」の自殺ではなかったのかなと思いました。私が選んだ一文は、無くても物語に違和感はないのにわざわざこの一文を入れた

ことによって、「私」の未来を照らし生涯を貫く黒い光が持つ意味は、とても重いものなんだと実感させられました。少し前の文から、私の選んだ一文の次の文までは、ほんの一瞬の出来事なのに何行も使って表現しています。そうすることによって、リアリティが増して、読者自身が先生の立場になったような気にさせようとしたのではないかと思いました。一行一行に夏目漱石のテクニクが詰め込まれているなど感じました。

大事な場面では、一行一句、読者をその人物になったかのように思わせたり、深く考えさせるような小説を書いている夏目漱石はとてすごいなと思いました。そういう文が「ころ」にはたくさんあります。読者まで感情移入させられ、考えさせられる作品で、とても面白い作品でした。

読書感想文 選んだ一行

惜しくも入賞を逸しましたが、最終審査候補となった作品と、その「わたしの一行」を掲載します。

《中学生の部》

大妻中学校 2年

題名 今を生きるコツ

作品名 『三四郎』

選んだ一行 とらわれちゃだめだ。

大妻中学校 2年

題名 一行で印象が変わる

作品名 『倫敦塔』

選んだ一行 そうしてその中に冷然と二十世紀を軽蔑するよ
うに立っているのが倫敦塔である。

成城中学校 2年

題名 表裏一体

作品名 『明暗』

選んだ一行 精神界も同じだ。精神界も全く同じだ。何時ど
う変わるかわからない。そうしてその変わる所を己は
見たのだ。

筑波大学附属中学校 2年

題名 漱石の言葉と生きる

作品名 『硝子戸の中』

選んだ一行 そうしてその死というものを生よりは楽なもの
だとばかり信じている。ある時はそれを人間と
して達し得る最上至高の状態だと思ふ事もあ
る。

《高校生の部》

光塩女子学院高等科 2年

題名 漱石が勧めた道

作品名 『硝子戸の中』

選んだ一行 私は「そんなら死なずに生きていらっしやい」と云った。

東京都立桜修館中等教育学校 2年

題名 償い

作品名 『いころ』

選んだ一行 傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。

東京都立桜修館中等教育学校 2年

題名 違和感

作品名 『いころ』

選んだ一行 「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。」

東京都立桜修館中等教育学校 2年

題名 漱石の分岐

作品名 『硝子戸の中』

選んだ一行 「死は生よりも尊い」

東京都立桜修館中等教育学校 2年

題名 他人と関わる孤独

作品名 『いころ』

選んだ一行 「ちょうど好い、やってくれ」

広島県立海田高等学校 2年

題名 移り変わるもの

作品名 『いころ』

選んだ一行 それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方ありません。